

[社 会]

社会的事象を多角的に見たり考えたりする力を伸ばす 社会科授業の工夫

－第4学年「まちをひらく～岡村貢と上越線～」の学習を通して－

布施 博紀*

1 はじめに

社会科の学習指導要領改訂の基本方針¹⁾では、児童が社会的事象に関心をもって進んでかかわり、児童の発達の段階に応じて、それらの意味や働きを多面的・多角的に考え、公正に判断できるようにするとともに、児童一人一人に社会的な見方や考え方が次第に養われるようにすることを一層求めている。第3・4学年では、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにしている。このことから、児童一人一人が社会的事象について自分なりの見方や考え方をもち、それを社会的なもの見方や考え方へと深めていくことが大切であると考えられる。

これまで私の授業では、課題を教師で提示し、児童が教科書や資料集などで調べたことや、写真やグラフなどの資料を見て気づいたことをまとめることが多かった。そして、ポスターセッションのように発表させることを多く行っていた。その結果、児童はあまり深く探ろうとはせず、事象の一面だけを見て全体を判断してしまう傾向があった。また、発表段階でのかかわり（ここでのかかわりとは児童相互のかかわりである）はあっても追究段階でのかかわりはあまりなかったため、児童の事実に対する自分の考えについて思考の深まりがなかった。つまり、児童一人一人に明確な問いがなく、調べたことや自分なりの浅い考えをまとめたばかりであり、集団での思考によって見方や考え方を深めることができていなかった。北俊夫²⁾が述べている「社会的なもの見方や考え方のうち、特に①社会的事象を多面的に見たり考えたりする。②社会的事象を公正に見たり考えたりする。③社会的事象を比較・関連・総合して見たり考えたりする。④社会的事象を時間の経緯や空間的な広がりの中で見たり考えたりする。」という4点について至っていない。

そこで、今回の実践では、児童が教材や友達と進んでかかわることを通して、社会的事象を多角的に見たり考えたりするという力を伸ばすことを目指す。なお、本研究で行う第4学年の開発単元において「多角的に見たり考えたりする」力とは、「様々な資料や友達とのかかわりを通して、『上越線開通』という社会的事象を当時の様々な人々の視点から思考したり、今の様々な人々の視点から思考したりできる」力と捉え、研究を進める。

2 研究仮説

児童が教材に主体的にかかわることができるように教材を身近なものとしてとらえさせることや、つかむ、調べる、考えてまとめる全ての段階で児童同士がかかわり合いながら学習を展開することは、児童一人一人の社会的事象を多角的に見たり考えたりする力を伸ばすのに有効である。

3 研究の方法

第4学年の「まちをひらく」の単元を通して研究を行う。

(1) 単元名 まちをひらく ～岡村貢と上越線～

(2) 目標

- 上越線の開通に尽くした先人の願いや苦勞、工夫について関心をもって調べ、地域に対する誇りと愛情をもつことができる。
- 上越線の開通に尽くした先人の願いや苦勞、工夫及び上越線が開通したことによる地域の人たちのくらしの変化について当時の生活環境をもとに考え、年表に表すことができる。

(3) 単元について

前単元「昔のくらし」では、昔の道具を中心に調べ、道具から時代の背景や生活の様子を考えた。本単元では、地域

* 南魚沼市立石打小学校

の発展に尽くした人物として上越線開設を訴え続けることによって上越線が開通し、地域の人々の生活を向上させた岡村貢を取り上げる。その業績である上越線開設について、図書資料や年表、地図やインタビューなどを通して調べる。そして、国の許可を得るための岡村貢の努力や知恵、地域の人の協力を得ながら活動したことなどに焦点を当て、関東圏との人や物資の輸送が便利になり地域が発展したことを学習するようにする。その際、結果だけでなくそれまでの働きや苦心などの過程を中心に学べるようにする。具体的には、工事やそれまでの街道の宿場町、長岡まで物資を運んでいた船や塩沢の住人、貢への協力者など様々な立場の人々の思いを考えながら学習を進めていく。さらに、上越線が開通したことによって当時の人々の生活にどのような影響や変化を及ぼしたかを考える。

これらの学習を通して地域の発展に尽くした先人に畏敬の念をもたせるとともに、地域に対する誇りと愛情を育てていきたい。

(4) 指導の手立て

① 資料の吟味と提示の工夫

本単元はややもすると文章資料の読み取りと教師の解説が中心になりかねない。そこで、導入段階で教材との出会いにインパクトをもたせたい。児童の学習意欲を喚起するような資料や提示方法を工夫し、児童の興味や関心を引き出したい。その際、事象の背景や立場が違ふと事象に対する認識が違ふことを考えさせるための資料の精選と発問の工夫を図る。具体的には「これは何だ?」「どうして～なんだ?」という疑問や思考が生まれるような資料を用意し、資料の提示と予想を繰り返すようにeライブラリアドバンス(ライズ株式会社の教材作成ソフト)を用いて小出しに提示する。また、全体像を出すのではなく一部を隠し、順番にめくっていくことができるようにする。児童にとって教材が身近に感じられるようになると同時に、調べる必然性を感じることもできると考える。

調べる段階においても、児童の思考をゆさぶる資料の吟味と提示の工夫に努める。

② 児童同士のかかわり合いをもたせる工夫

ア 課題設定の場面

子どもたちが予想したことや気付いたことを付箋に書く。それを全体で食い違っているものや同じようなものに分類させることでいくつかの課題を設定する。これにより、根拠がはっきりしていないあいまいさに気づき、くわしく知りたくなったり調べたくなったりする意欲が向上するのではないかと考える。

イ 途中経過報告会の設定

児童は自分たちで考えた課題を分担して調べる。グループごとに調べていくうちに様々な気付きや新たな疑問が生まれてくるであろう。そこでグループ内で意見交換しながらまとめたり整理したりさせる。また、毎時間全体で途中経過報告をする。人前で話すためには、グループ内で考えを練り合わせておく必要があるため、児童は必然的に事象の共有、検討、整理をすることを考える。他のグループからの報告や質問されることから、「あれ。」という疑問や自分たちの調べたことのあるあいまいさを感じ、より深く追究したり考えたりすることを期待する。

ウ 年表作成

まとめの段階では、追究したことをクラス全員で岡村貢、役人、作業員、町の人などの吹き出しを入れた年表をつくる。この年表作成には大きく3つの効果を期待する。1つ目は、上越線開発までの長い歴史を実感すること。2つ目に、クラス全員で1つの年表をつくり、教室に掲示したり他校との交流の際に発表したりしてたくさんの人に紹介するという目的意識をしっかりともち意欲が継続すること。3つ目に、人物の気持ちを考えることで根拠を明確にしようとしたり、上越線という事象を多角的に捉えるになったりすることである。

(5) 指導計画(全10時間)

次	主な学習活動(指導の手立て)	評価
1 つかむ (1時間)	当時の資料から、上越線や岡村貢について学習していききたいことを考える。 ①②ア(課題設定の場面)	予想や疑問を友達と意見交換して課題を設定し、追求していこうとする意欲をもつ。
2 調べる (4時間)	○調べ方を話し合い、活動の見通しをもつ。 ○グループ別に調べ学習をする。 [調べさせたいこと] ・岡村貢のこだわり・岡村貢という人となり ・作業員の苦勞・生活の変化 ②イ(途中経過報告会の設定)	・必要な情報を収集することができる。 ・上越線の開通に尽くした先人の願いや苦勞、工夫について関心をもって意欲的に調べることができる。 ・友達とかかわり合うことで多面的な見方をするすることができる。

3 考え、 まとめる (5時間)	○報告会を行う。また、上越線がなかった場合の今の新潟県や南魚沼市の様子を考える。 ○追究したことを友達と協力して年表にまとめる。 ②ウ (年表作成)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人々の生活の向上に尽くした先人のはたらきや苦心を理解することができる。 ・これまでの学習や生活体験をもとに考えを広げることができる。 ・友達とかかわり合いながら、調べたことを分かりやすく年表にまとめることができる。 ・先人の思いを多角的に考えることができる。
------------------------	--	--

4 実践と考察

(1) つかむ場面 (1時間)

T : (岡村貢の生家跡地等の写真を掲示し)「これは誰でしょう。」
C : 「何か見たことあるなあ。」
T : (岡村貢の写真や銅像写真を小出しに掲示した)
C : 「岡村貢だ。」
C : 「そういえば、あの銅像石打駅にあったなあ。」
T : 「何をした人ですか。」
C : 「…。」



写真1 eライブラリアドバンスを活用した資料提示

名前と銅像が石打駅にあることは知っているという児童が半数ほどいた。しかし、何をしたのかは知っている児童はなく、「銅像になるくらいだからすごい人なんだよね。」というレベルであった。そこで、もう一度駅にある銅像の写真を見せ予想させた。

T : 「この地域の石打駅に銅像がある岡村さんは何をしたのでしょうか。」
C : 「駅に銅像があるってことは電車を作ったのかな。」
C : 「いや、電車は横浜かどこかが最初だから駅を作ったんじゃない。」
C : 「この辺に電車を通らせたのかな。」
T : (窓の外の線路を指しながら)「実はあそこに電車を通らせるためにがんばった人です。」
C : 「そうなんだ。でもそれって銅像になるくらいすごいことなのかな。」

児童にとっては電車はあって当たり前という意識であったようだ。その時、一人の児童が「でも昔だったら大変なことなんじゃない。この前昔の道具について勉強したけど…」と、昔は自動車や電車はなく、徒歩や荷車が交通手段の主流であったことをつぶやいた。それから「だったら電車が通ったってことは相当うれしかっただろう。」と当時の人の思いを考える発言が出たので、上越線開通を祝う各駅の式典の写真や三国街道の宿場町が衰退した写真を提示した。

T : 「何をしているのでしょうか。」
C : 「開通祝って書いてあるからパレードみたいなことしてるんだな。仮装までしてるよ。」
C : 「めっちゃ喜んでるね。そんなにうれしいことなのかな。」
C : 「この辺の地域の人だけでなく、群馬県や長岡とかの人まで喜んでるね。」
T : 「何でこんなにもたくさんの人が喜んでるのだろう。」
C : 「移動が楽になったんじゃないかな。前は歩きだったから。」
C : 「行きたい所まで早く行けるようになった。」
T : 「その他にも喜んでる理由はないかな。また、本当にみんなが喜んでたのかな。」
C : 「…。」

この段階では、児童は喜びの様子しか印象がなく、三国街道の写真は「何だろうこの写真は」という認識であった。また、喜んでる理由も便利さのことだけ予想していた。その後は、船や歩き、人力車や服装等の当時の写真を提示したり、信越線図や上越線図を提示したりした。すると、提示した資料から根拠を見つけ、やはり便利になったから喜んでると結論づけた発言があった。また、履物、道路状況等の環境について着目した発言も出たが、結局は便利さばかり言及していた。だが、「やっと開通した」「苦勞が報われた」という観点での喜びにも着目してほしいという思いのもと、上越線が通っているところの航空写真と地形図や時間の経過が分かるような自作の年表を提示した。児童は険しい山の様子に気づき、100年前にどのようにしてトンネルを掘ったのかということや建設を目指して工事が着工するまでの時間の長さ驚いていた。

ここで、もう一度岡村の生家跡地の写真を見せ、A児宅のすぐ近くであることを知らせたり、地元塩沢駅の開通祝賀式の写真を見せたりした。すると、「地元の人だ。」「自分たちの地域であった出来事だ。」と興奮気味に言っていた。この地域のことであるということを知らせたことで、「ただの線路開通」から「身近なところでの出来事」と少なからず愛着をもったようだ。

最初にこの地域の出来事であることをにおわせた資料提示の工夫をしたことで、いつもより児童の反応はよかった。また、「いろいろ予想するのはクイズみたいで楽しい。」という声が聞かれたり、意見交流の場で「あれ?」というズレも感じさせたりすることができ、児童が意欲的に調べていきたいと思うことにつながったと考える。しかし、1つ1つの資料を見る時間が短く、考える時間が十分でなかったため、資料の細かいところに関する発言はなかった。

その後、気づいたことやわくわく知りたくなったことを一人一人付箋に書かせた。12人中10人の児童が3つ以上書けた。内容は、「ひいおばあちゃんは喜んだのかな」「岡村貢はなぜ40年もがんばり続けたのか」「上越線ができてどんないいことがあったのか」「どうやって工事を進めたのか」などであった。それから、ある程度グループで分類した後、黒板の前で似たような考えや食い違っている考えなどに分類した。

付箋分類の話合い

C：「工事のことが書いてあるのが多いね。」
 C：「何か元気がない人がいるって書いてあるのがあるよ。」
 C：「え。喜ばないわけじゃない。」(多数の児童が納得する。)
 C：「でも、さっきぼつんとおばあちゃんがぼつんと立っていた写真があったから書いたんだけど。」
 C：「そういえば。もう一度その写真が見たい。」
 T：(三国街道の宿場町の写真を提示する)
 C：(多数の児童が)「ああ。本当だ。さみしそうだね。」
 C：「ということは、喜んでいない人もいるのかな。」

以上のように、当時の人々の感情についての議論が始まった。しかし、この日の提示した資料だけでは判断が無理だという雰囲気になった。

このようにかかわり合う中で、「当時の人々は上越線開通をどう思っていたのだろう」という大きなテーマが生まれた。また、このテーマを解決するべく、分類した付箋をもとに「岡村貢という人について」「工事の様子」「上越線が開通するまで」「南魚沼地域の人々の様子」という課題が設定された。

付箋に書くことで自分の考えや疑問をしっかりとったことや、教師はあまり口を出さず子ども主導にしたことが議論を活発にさせたと考える。議論が活発になったから多角的に見ようとし、いろいろな課題が出た。しかし、資料が変わるごとに疑問や予想はしていたのだが、1つ1つの資料を見る時間が短かったことや書く活動は授業の最後だけであったことが最初の方の資料についての考えを忘れさせていた。その結果、教師が期待していた「生活の変化」という課題は児童から出なかった。

(2) 調べる場面(4時間)

前段階で分かったこととこれから追究していきたい課題を明らかにしていたことにより、どのグループも何を調べるのかははっきりしていた。グループごとに調べていくうちに、様々な気付きや新たな疑問が生まれてきた。そして、その都度意見交換しながら調べていた。しかし「人々の様子」を調べていたグループは、いくつかの資料を吟味しながら調べるのではなく、開通を喜ぶ駅の様子の写真を数枚集め、どの地域もみんな喜んでいると結論付けた。これでもう課題が解決したと満足している様子であり、思考の広がりや深まりが全く見られなかった。そこで、六日町から長岡まで走っていた船の写真や船便が衰退していったことが分かる資料を見せた。すると、「そういえば宿場町も…」と思い出し、地域によって上越線開通に対する受け止め方が違うのではないかと探り始めた。調べる段階でも、児童の思考をゆさぶる展開をある程度考えておく必要性を感じた。

途中経過報告会では、最初のうちは「細かいところまでよく調べていてよかった。」「大きな声で発表していてよかった。」など、グループへの賞賛の声ばかりであった。普段、いいところを褒めるように話していたので、学級作りの面ではいいことであるが、考えは深まらない。そこで、「自分たちのグループが調べたことと同じところがあったよね。それと照らし合わせて質問を考えてごらん。」と指示した。すると徐々に突っ込んだ内容の質問がなされるようになってきた。質問されたグループは質問に答えられないことが多く、「もっと調べて質問に答えないと」という意識をつくり出すことができ、結果として事象を別の視点から見ようとする事につながった。具体的には、「工事の様子」を調べていたグループでは最初は工事にかかった費用や使った道具にばかり着目していたが、質問されることで工事に伴う

苦労や悲劇などについても着目できるようになった。

「岡村貢」を調べていたグループは、なぜ上越線にこだわったのかということや全線開通を見届けることができなかった無念さなど早くから岡村の思いに着目し、古文書のような4年生にとっては難しい文献をあさっていた。そして、「上越線から手を引いてから20年間、どのように暮らしていたのか」という質問に答えるべく資料探しに奔走していた。私も探したが見つけ出すことはできなく、児童の願いをかなえてやることができなかった。後で分かったことだが、子孫である方が群馬県に在住しているそうなので話だけでも聞かせてあげたかった。私の調査不足であった。もっと児童の思考を予測し、児童のニーズに応えられるように資料や人材を探しておく必要性を感じた。

児童の感想には「せっかく調べ終わったと思ったのに難しい質問をされて、最初は残念な気持ちになった。でも新しいミッションを与えられたみたいで楽しくなってきた。」というものがあつた。児童に資料収集を任せると、多様すぎて不確実で中途半端な認識が生まれることが多い。そこで、資料収集を児童に任せず教師が準備しておいた中から選べたことで、本質に迫る問いが生まれたと考えている。また、途中経過報告会を開くことによって、より深く追究しようとする機運を高めることができた。そして、自分たちだけでは考えることができなかった観点で事象を見ようとすることができた。しかし、この段階の最初に調べ方を考えさせ、児童は当時の人の思いを共有するために疑似体験をしたり見学に出かけたりしたいという計画を立てたのだが、かなえてやれなかった。時間的に難しかった面もあるが、昔の仕事ぶりが分かる資料や道具を保有している施設や人とのネットワークを作る必要を感じている。

(3) 考え、まとめる場面（5時間）

まず、グループごとにこれまで調べたことを整理した。そして、まとめられたノートをもとに岡村貢、役人、作業員、町の人などの思いや言葉を書いた吹き出しを入れた年表をつくった。吹き出しの内容は、小グループで話し合いノートにまとめた後に、全体でいろいろな立場の人の思いを比較させながら相談して決定していった。色々な立場の人の吹き出しを全体で考えることで、より理解や考えを深めることができたと思う。また、上越線開通という事象を自分の調べた立場の視点から見ただけでなく、色々な立場の視点から見ることにも役立った。さらに年表を大きな模造紙に書くことは、時間の経過をとらえることに役立ったと考えている。



写真2 寸劇の様子

年表作成後は、隣の小学校との交流会で上越線の劇を発表したいという声から出てきた。そして、年表に貼った吹き出しを全部言うことは何を伝えたいのかははっきりしないという意見が出され、それぞれの役割の人に何をどのように言わせるかを議論した。ここで、児童は苦悩した。どのことを伝えたいのか選べなかったのである。そこから、そもそも上越線開通をみんなどう思っていたのかという大きなテーマを振り返った。年表をもとに多数の児童が「うれしかった」と結論づけたが「喜んでない人もいる」という声も聞かれ平行線をたどった。しかし、ある児童が「別に結論が出なくていいんじゃない。どう思うかは人それぞれだったもん。」と言ったことでその場は収まった。

このことから、1つの事象には色々な事実やたくさんの人の思いが隠されていることに気づき、すぐに結論を導くことは難しいと再認識させることができたと考える。

単元全体の学習後、児童は次のような感想をもった。

A児：上越線開通を喜んでいるのは便利になったからだけでないことが調べていくうちに分かった。峠を歩いて越える時に凍死したり長岡までの船で事故に遭ったりしていたから電車ができて安全になったことがうれしいのだと思った。また、トンネル工事で亡くなった44人のことを思えばほど完成がうれしいのだろうと思った。

B児：岡村貢が全財産をかけたり、工事でたくさんの人が亡くなったり、上越線ができたことによってつぶれたお店や会社があつたりして、いいことばかりでもないんだなと思った。普通の人（塩沢の町の人）は本当はどう思っていたのか、タイムスリップしてインタビューしてみたい。

C児：100年くらい前の人が上越線を作ったから、今新幹線や高速道路が走っているのかもしれない。だとすると今の人のためにありがとう。もし上越線がなかったら今のように魚沼産コシヒカリは有名ではないのかな。

D児：身近に岡村貢というすごい人がいたことは、うれしい気持ちになった。岡村貢さんのように地域のために全てをかけるという大きなことはできないかもしれないけど、この地域のためになることを少しでもいいから考えていきたい。今は銅像になっているけど、岡村さんが生きていたうちはみんなに感謝されていたのかな知りたくない。

これらの文章から分かるように、事象の一面だけとらえることでは決して書けない感想が多く見られた。特に、B児は、普段自分の考えをあまり書けない児童であるが、この感想のようにいいところだけでなく負の面も考えて書くことができた。これは、友達とかかわりながら調べたり考えたりした成果だと考える。

これらの記述には、単に「昔のこと」ととらえるのではなく今の自分とつなげて考えたり、様々な視点に立って考えたりしていると表現がなされていると言える。また、さらに追究したり自分の生き方を考えたりしたいという態度も伺える。これは、教材に進んでかかわったことや友達とかかわる中で、様々な情報や刺激が与えられ、社会的事象を多角的に見たり考えたりすることにつながったと言える。

5 成果

○教材を身近なものとしてとらえさせることや、導入時でのeライブラリアドバンスを用いての資料提示は、児童の「知りたい。」「調べたい。」という意識を向上させ、調べる必要感を感じさせることに有効であった。そして、つかむ段階で、教材に進んでかかわろうと思わせたことが、深く探っていく手立ての1つとなった。また、児童をゆさぶったり葛藤させたりできるような資料や発問を準備しておけば、児童の探究心や話し合いたいという思いを継続させたり学習や認識を深めたりすることも確認できた。

○かかわり合う活動を軸にすることで、児童は以前よりも互いの意見を聞き合い、考えを広げたり深めたりすることができるようになった。特に、立場が違えば事実に対する認識が違うことに気づいたり、違った観点で事象を見ようとしていたりすることにつながった。

○年表を作成することや劇をすることなど、ある程度児童が決めたゴールに向かって学習を進めることは探究意欲の継続につながった。また、よりよいものをつくり上げようとするのが「話し合いたい」という児童のかかわり合うことへの欲求を高め、討論を活発化させ先人の思いを多角的に見たり考えたりすることにつながった。

これらのことから、調べたい、話し合いたいという必然性を感じさせ、児童が教材や友達と進んでかかわりながら学習を進めることは、社会的事象を多角的に見たり考えたりする力を伸ばすことに有効であったと考える。

6 今後の課題

○多角的に捉えさせたいという思いのもと違った視点の発言を取り上げようとするあまり、児童同士のかかわりに割って入って口を出しすぎることがあった。その結果、全体で話し合う場面では対教師発言をする児童が多くなってしまった。児童から児童へと思考がつながっていくことができるような、教師としてのコーディネイトの力量を高めていく必要がある。

○考え方や見方を重視するあまり、知識として身に付けてほしいことはおろそかにしがちになった。例えば、新潟県がなぜ雪が多く降ったり米をたくさん作ったりしているのかということは、地形や気象などの様々な観点から説明できるようになった子が多い。しかし、新潟市や長岡市、まして自分たちの住んでいる南魚沼市の位置さえ正確に分からない児童もいた。思考力を身に付ける授業を目指しつつ覚えなくてはならないものは確実に身に付けさせるといった工夫をしていかななくてはならない。

○話し合いの中で、どの児童も多角的な見方ができるようになり、考えを深めることができた。しかし、様々な視点からのたくさんの情報を1人では整理できず、表現できない児童が少なくない。まずは「書く」力を中心に表現力の向上を図る必要性を感じている。

○今回は、社会的なものの見方や考え方を「多角的に見たり考えたりする」と捉え、その力を伸ばそうとした。しかし、北の言う社会的事象を公正かつ空間的な広がりの中で見たり考えたりすることにはいたっていなかった。それらの要素を伸ばす方法を探っていかなければならない。

〈引用文献〉

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 社会編』 2008年
- 2) 北 俊夫 『「生きる力」を育てる社会科授業』 明治図書、1996年

〈参考資料〉

- ・南魚沼市教育委員会 『わたしたちの南魚沼市』 2007年
- ・新潟県湯沢町・旧塩沢町 『鉄道は山脈の彼方に』 1991年
- ・熊木 貞夫他 『南魚沼今昔写真帖』 郷土出版社 2001年
- ・塩沢町観光協会 『上越線の父 岡村貢』 2002年